昭和 30 年代における子どもの屋外遊びを支えていた環境条件に関する研究

Study on Environmental Factors to Form Children's Play in the Outdoor Space in 30s in the Showa Era

寺内 雅晃* 加我 宏之** 下村 泰彦** 増田 昇**
Masaaki TERAUCHI Hiroyuki KAGA Yasuhiko SHIMOMURA
Noboru MASUDA

Abstract : This study was intended to clarify both physical condition and children's community that warranted the outdoor plays in 30s in the Showa era. According to the survey, the number of play kinds mentioned by those who surveyed was found to amount to 598. The study found, based on the result, that key physical conditions included a variety of waterfront space with diversity of topography, grounds covered with diversity of vegetation, flat space in village. While as children's community, it was important that a playgroup consisted of a lot of members of different ages to secure safety and pass on their play to the next generation. Therefore it is important to make the most of secondary nature and to revive children's community.

Keywords: 30s in the Showa era, Children's Play environments, Outdoor space, Physical conditions, Children's community
キーワード：昭和 30 年代、遊び環境、屋外空間、物理的条件、遊び仲間の条件

1. はじめに

昭和 40 年代に始まる高度経済成長の本格化に伴う急激な都市化の進行は、里山や小川等の自然地、町中に存在した原っぱや広場、遊べる街路といった子どもの遊び場所を奪い去ったといわれている。「都市化に伴う地域環境の変貌は、子どもの遊び空間の変化に決定的な影響を与えると同時に、子どもの遊び環境を悪化させる基本的要因となっている。」と藤本¹⁾は述べており、社会構造や子どものライフスタイル自体の変化に伴い、屋外遊びの貧困化が深刻になっている。一方、昭和 30 年代の都市近郊部では、子どもが里山や野原を駆け巡り、川や海も美しく、多くの生物が生息する等、豊かな自然が数多く残っていたといわれている²⁾。当時の子どもは昆虫や動植物に実によく触れ、自然という対象を具体的によく観察し特徴を捉え、友達や年上のものからの知恵の伝達と交流を通して様々な遊びを屋外で行っていた³⁾。また、自然と深い関わりを持っており、生活面や社会面、精神面でも自然との距離が近かったともいわれている⁴⁾。

子どもの遊びに関する既往研究を見ると、仙田ら^{5)~9)}は子どもの遊び環境を『仲間』、『方法』、『時間』、『空間』の 4 要素により総合的に捉えることで、都市や地域空間における遊び行為の量的・質的分析を行っている。長山¹⁰⁾は都市内に残された遊び場の環境において、遊んで面白いと感じる要因に『自然』、『遊び相手』、『遊具』、『オープンスペース』の存在があるとしている。佐藤ら¹¹⁾の研究では公園や庭、河川、社寺等の場所においてどのような遊びが展開し得るのが探られており、安藤¹²⁾による都市公園内の水系施設における魅力的な水辺の遊び構造に関する研究等も見受けられる。また、大越ら¹³⁾は遊びを通した自然体験による動植物の知識の獲得が可能であることを明らかにしている。その他にも、木下¹⁴⁾は農村集落の伝統行事から子どもが地域社会に参画するための仕組みを探っているが、これらの研究はいずれも子どもの遊ぶ場所が乏しくなったといわれる昭和 40 年代から現代における遊び環境や自然遊びを通した学習効果、遊び場所の空間条

件、社会的な仕組み等を探ったものといえ、豊かな自然が残され子どもが屋外を駆け回って遊んでいたといわれる昭和 30 年代当時を調査対象とした研究はほとんどない。

本研究では、豊かな自然環境が数多く残り、生活面や社会面、精神面でも自然との距離が近く、様々な屋外遊びが行われていたと考えられる昭和 30 年代に視点を絞り、当時の子どもの屋外遊びを支えていた各種の環境条件を物理的側面と社会的側面の内、遊びを支える条件として特に重要であるといわれている遊び仲間の側面から明らかにすることを目的とした。昭和 30 年代当時の屋外遊びを支えていた上記の環境条件を探ることは、自然との距離が離れ、子どもの遊びにとっての魅力的な屋外空間が数多く失われてしまっている現代の子どもの遊び環境を考える上で意義があるものと考えられる。

2. 研究方法

本研究では、子どもの屋外遊びを支えていた環境条件を探る時代として昭和 30 年代に着目した。前述したように当時は、遊びを取り巻く社会的背景が現代と大きく異なることや都市近郊部の集落内外の至る所に多様な遊びに対応する空間が存在していたと考えられるためである。調査対象地としては、大阪府の南部に位置する貝塚市を設定した(図-1)。昭和 30 年代の貝塚市は大阪市を中心とする典型的な都市近郊部であり、市内のほぼ全域が二級河川の近木川流域となっており、市域の約 24% が山林、約 59% が田畑であったように上流の山間部から中流の平野部、下流の海浜部まで各流域が育む豊かな自然環境が数多く存在していた。現在でも市域の約 19% が山林、約 31% が田畑であるように、山や海、河畔林、田畑が残されている(表-1)。14 歳以下の人口割合が昭和 30 年で約 28% であったものが平成 15 年では約 17% に低下している中で(表-2)、子どもの自然遊びや体験型学習を目的に小学校や社会教育施設が子どもの参画による活動を活発に行っており、活動の一環として祖父母の子ども時代の遊び環境

*大阪府立大学大学院農学生命科学研究科 **大阪府立大学大学院生命環境科学研究科

についても関心が高まっている地域である。

ヒアリング調査は、昭和30年代に貝塚市内で子ども時代を過ごし、現在も市内で在住している50代～60代の男性28名、女性2名の総計30名に対して、平成16年7月初旬～11月初旬にかけて直接面談方式で行った。その際、地域的な偏りが生じないように、市内全域の集落から数名ずつ対象者を選定した。なお、本研究では屋外での遊びの環境条件を探ることを目的としているため被験者の大部分を男性としたが、女性2名に関しては得られた全ての遊びが男性同様に屋外遊びであったため被験者として採用した。本研究では、図-2に示すヒアリング項目を設定した。物理的条件に関しては、まず屋外遊びを行っていた場所を特定するために「遊び場所」の項目を設定し、次いで遊びの頻度やしやすさに大きく係る「遊び場所までの距離」の項目を設定し、さらに遊び場所の空間構造が遊びの内容に大きく影響すると考えられることから「遊び場所の微地形」、「遊び場所の土地の被覆状態」の2項目を加えた。また、遊びの内容には遊び道具が大きく関与するとともに遊び場所の空間構造によって遊び道具の内容やその調達方法が異なると考えられることから「遊び道具と調達方法」の項目を設定した。また、友達や年上のものからの知識の伝達と交流が遊びを支える重要な要因であるとの既往研究^{3), 4)}を踏まえ、当時の子どもたちがどのような遊び集団を形成していたのかを明らかにするため、遊び仲間の条件としては「遊びの対象年齢」、「遊び仲間の人数」、「遊び仲間の世代構成と中心人物」の3項目を設定した。ヒアリングでは、1人当たり2時間～3時間程度かけて子ども時代にどのような遊びを行ったのかを思い出してもら

表-1 地目別有祖地の割合 (単位: km²)^{16), 17)}

	田	畑 (樹園地含む)	宅地	池沼	山林	原野	雑種地	計
昭和35年	8.5	2.1	2.8	0.003	4.3	0.06	0.18	18.0
平成15年	3.9	1.5	7.5	0.0028	3.3	0.04	0.18	17.5

表-2 年齢別人口構成比の割合 (単位: 人)^{16), 17)}

	0～ 4歳	5～ 9歳	10～ 14歳	15～ 19歳	20～ 30代	40～ 50代	60代 以上	計
昭和30年	4917	5760	5008	7409	18982	10123	3967	56166
平成15年	5124	5099	4798	4723	25238	23263	20863	89108

図-1 調査対象地の土地分類図 (昭和51年)¹⁵⁾

いながら、一つ一つの遊びごとに物理的条件を構成する5項目と遊び仲間の条件を構成する3項目に関して詳しく聞き取りを行った。なお、被験者には昭和30年代の屋外遊びの状況を詳しく思い出してもらう必要があり、面談により繰り返し質疑応答が可能であるヒアリングを調査手法として採用した。ヒアリングにより得られたデータは、被験者の記憶を頼りとしているため、全てが正確なデータとは言いがたいことも留意しながら研究を進めた。

解析では、ヒアリング調査により得た個々の遊びを、遊び内容が重複するものは同一のものとして遊びごとに整理した。本調査では総数598個の遊びを得たが同一のものを整理することによって83種の遊びが特定でき、それぞれの遊び毎にその個数を把握した。さらに、これら83種の遊びの具体例を研究の趣旨に沿うよう遊び内容の統合化を試みた。統合化には、仙田の提唱する「人との遊び (ゲーム的遊びや模倣等)」、「物との遊び (生物遊びやおもちゃ遊び等)」、「行為の遊び (身体動作遊びや水遊び等)」、「場での遊び (冒険遊びやアジト遊び等)」を参考にした。その際、集団で行うゲーム的な遊びは遊び場所の物理的条件の違いによって実行できる内容が大きく異なることや、物を対象にした遊びの内、特に生物遊びは、遊びの空間構造を捉える上では水系生物と陸系生物では大きく異なること、動物と植物においても違いが生じることも留意して細区分化した。その結果、「身体動作遊び」と「水遊び」、「乗り物遊び」、「冒険遊び」、「大人の目から逃れた場所での遊び」、「個人戦ゲーム遊び」、「攻防戦遊び」、「球技遊び」、「模倣遊び」、「いたずら」、「造形遊び」、「水系動物遊び」、「陸系

図-2 本研究における屋外遊びを支える環境条件

表-3 各条件のアイテムごとのカテゴリー

	物理的条件					遊び仲間の条件		
	遊び場所	遊び場所までの距離	遊び場所の微地形	遊び場所の土地の被覆状態	遊び道具と調達方法	遊びの対象年齢	遊び仲間の人数	遊び仲間の世代構成と中心人物
カテゴリー	里山 (山・雑木林)	250m 圏内	平坦な地面	砂	現物使用	幼年期	小集団	同世代: 同い年のリーダーがいる
	里地 (田畑・水路・池)	250m～500m 圏内	段差	土	加工利用	小学生期	中集団	同世代: 特定のリーダー(お兄さん)
	河川 (川)	500m～1000m 圏内	緩やかな斜面	石	自宅持ち寄り	中学生期	大集団	多世代: ガキ大将や年上のリーダーがいる
	海浜 (海)	1km以上	急な斜面	岩	購入			多世代: 特定のリーダー(お兄さん)
	広場 (グラウンド・空き地・広場・境内・庭)		浅い水深	草	道具なし			
	道 (道路・路地)		深い水深	樹木				
	アナーキスペース (工事現場)			水				
				人工物				

動物遊び」,「陸系植物遊び」,「水系植物遊び」,「おもちゃ遊び」の16種類に83種の遊びを統合化した。

次に,屋外遊びを支える環境条件を探索解析では,16種類に分類した遊びの中でも,ヒアリング調査により得た個数が20個以上確認できた11種類(表-4:◎印)の遊びを対象として,物理的条件と遊び仲間の条件の関係を探った。まず,遊びの種類ごとに物理的条件と遊び仲間の条件の各アイテム毎にカテゴリー別遊びの出現数を単純集計(複数回答可)しその関係性を考察した。さらに,物理的条件の各アイテムにおいてカテゴリー数の多い,遊び場所と遊び場所の微地形,遊び場所の土地の被覆状態の3項目に関しては,多変量解析の一つである双対尺度法を適用し,遊びの各種類とカテゴリーの布置状況から関係性を探った。

なお,各遊びが行われていた物理的条件と遊び仲間の条件のアイテムと各アイテム内のカテゴリーは以下のように設定した(表-3)。物理的条件の中の遊び場所というアイテムに関しては「里山」・「里地」・「河川」・「海浜」・「広場」・「道」・「アナーキースペース」,遊び場所までの距離に関しては「250m 圏内」・「250m~500m 圏内」・「500m~1000m 圏内」・「1 km 以上」,遊び場所の微地形に関しては「平坦な地面」・「段差」・「緩やかな斜面」・「急な斜面」・「浅い水深」・「深い水深」,遊び場所の土地の被覆状態に関しては「砂」・「土」・「石」・「岩」・「草」・「樹木」・「水」・「人工物」,遊び道具と調達方法に関しては「現物使用」・「加工利用」・「自宅持ち寄り」・「購入」・「道具なし」を設定した。遊び仲間の条件の中の遊びの対象年齢というアイテムに関しては「幼年期」・「小学生期」・「中学生期」,遊び仲間の人数に関しては「小集団」・「中集団」・「大集団」,遊び仲間の世代構成と中心人物に関しては「同世代:同い年のリーダーがいる」・「同世代:特定のリーダーはいない」・「多世代:ガキ大将や年上のリーダーがいる」・「多世代:特定のリーダーはいない」を設定した。

3. 解析結果及び考察

(1) 昭和30年代の貝塚市における屋外遊びの概要

昭和30年代当時の貝塚市における屋外遊びとして83種598個の遊びが確認できた(表-4)。

分類した16種類の遊びごとに見ると,魚釣りやザリガニとり等の水系動物遊びは115個と数が最も多く,当時の男の子を中心とする子ども達にとって一番人気のある遊びであることが分かった。ビー玉やべったん等の個人戦ゲーム遊びは83個であり,鬼ごっこやチャンバラといった攻防戦遊びも82個と非常に多く,水系動物遊びに次ぐ人気のある遊びであったといえる。また,水泳等の水遊びが59個で,野球やドッジボール等の球技遊びが50個,竹鉄砲や飛行機遊び,パチンコ球遊び等のおもちゃ遊びが44個,坂すべりやターザンごっこ,木登り等の身体動作遊びも43個と比較的数の多い遊びであった。その他にも,虫とりやメジロとり等の陸系動物遊び,基地作りや爆竹遊び等の大人の目から逃れた場所での遊び,木の実とりや山菜とり等の陸系植物遊び,乗り物遊びもそれぞれ20~30個程度確認することができた。

以上より,昭和30年代の貝塚市の男の子を中心とした遊びでは,水辺の遊びを中心に自然遊びが数多く確認でき,その他にもゲーム的な遊びや体を使った遊び,昔懐かしいおもちゃを使った遊び等の数多くの屋外遊びが展開していたことが確認できた。

(2) 屋外遊びを支える環境条件

(i) 遊びと物理的条件との関係

図-3,5,6は遊びと遊び場所,遊び場所の微地形,遊び場所の土地の被覆状態を双対尺度法に適用した解析結果を示している。また,図-4は遊び場所までの距離,図-7は遊び道具と調達方法の単純集計結果を示している。

遊びと遊び場所との関係を見ると(図-3),身体動作遊びや

表-4 屋外遊びの内容

遊びの種類とその個数	遊びの統合化とその個数
魚釣り 60	水系動物遊び・115 (◎)
貝とり 18	
カニとり 13	
ザリガニとり 9	
カエルとり 6	
ナエキンギョとり 2	
オタマジャクシとり 2	
水生昆虫とり 2	
エビとり 1	
カメとり 1	
貝殻集め 1	個人戦ゲーム遊び・83 (◎)
ビー玉 28	
べったん 28	
こま回し 8	
水切り 4	
釘刺し 4	
石けり 3	
カッチン 3	
座繰上げ 2	
キャッチボール 1	
瓦なげ 1	攻防戦遊び・82 (◎)
ペーゴマ 1	
鬼ごっこ 16	
カンけり 16	
かくれんぼ 15	
チャンバラ 12	
陣とり 9	
合戦 5	
馬のり 4	
戦争ごっこ 2	
おしくらまんじゅう 1	水遊び・59 (◎)
だるまさんがころんだ 1	
マツボックリ合戦 1	
水泳 54	球技遊び・50 (◎)
舟遊び 5	
野球 30	
ドッジボール 10	おもちゃ遊び・44 (◎)
ソフトボール 9	
キックベース 1	
竹鉄砲遊び 15	
竹とんぼ 9	
風上げ 7	
飛行機遊び 5	
手裏剣遊び 3	
パチンコ玉遊び 2	
笹舟遊び 1	身体動作遊び・43 (◎)
弓遊び 1	
車輪回し 1	
坂すべり 11	
ターザンごっこ 8	
相撲 8	
ケンパ 6	
縄跳び 4	
木登り 3	
川わたり 2	陸系動物遊び・35 (◎)
空転遊び 1	
虫とり 31	
メジロとり 2	大人の目から逃れた場所での遊び・23 (◎)
ヘビとり 1	
スズメの卵とり 1	乗り物遊び・21 (◎)
基地づくり 22	
爆竹遊び 1	
竹馬 14	陸系植物遊び・21 (◎)
カン馬 6	
ローラースケート 1	
木の実とり 12	
山菜とり 4	
ツクシとり 2	
スカンボとり 1	造形遊び・9
マツボックリ集め 1	
スクドかき 1	
砂遊び 2	
笛づくり 2	
レンガ細工 2	
はんこづくり 1	冒険遊び・8
だんじりづくり 1	
刀づくり 1	
探検 5	いたづら・2
トロッコ遊び 2	
鉄橋遊び 1	
落とし穴づくり 2	水系植物遊び・2
ヒシとり 2	
電車ごっこ 1	模倣遊び・1
83種類 598個	16分類

乗り物遊び、個人戦ゲーム遊び、球技遊び、攻防戦遊び、おもちゃ遊びは、『広場』や『道』、『アナーキースペース』と同一のグループに布置されており、境内や広場、道路、工事現場といった集落内に存在する各種のオープンスペースで行われていることが分かる。一方、水遊びや水系動物遊びは『河川』や『海浜』、『里地』と同一のグループに布置され、各種の水辺空間が遊び場所を選択されていたこと、大人の目から逃れた場所での遊びや陸系動物遊び、陸系植物遊びは『里山』と同一のグループに布置され自然性の高い山林や雑木林を遊び場所としていたことが分かる。

遊び場所までの距離（図－４）では、全ての遊びにおいて、『250m圏内』が最も高い割合を示し、当時は身近な所に多くの遊び場所が存在していたことが伺える。一方、水遊びと水系動物遊び等の水辺の遊び場所だけは、近場だけでなく、『250m～500m圏内』や『500m～1000m圏内』、『1km以上』の割合も高く、自宅から比較的遠い水辺にも子どもたちは出かけていたことが伺える。

遊び場所の微地形との関係を見る（図－５）。乗り物遊びや個人戦ゲーム遊び、球技遊び、攻防戦遊び、陸系動物遊び、おもちゃ遊び等の多くの遊びが、障害物が何もない『平坦な地面』のオープンスペースを選択していることが分かる。また、身体動作遊びや大人の目から逃れた場所での遊び、陸系植物遊びでは『緩やか

な斜面』という微地形と同一のグループに布置され、勾配がある斜面が格好の遊び場所になっていたことが分かる。水系動物遊びと水遊びは、『段差』と『急な斜面』、『浅い水深』、『深い水深』

図－５ 遊びと遊び場所の微地形の布置状況

図－３ 遊びと遊び場所の布置状況

図－６ 遊びと遊び場所の土地の被覆状態の布置状況

図－４ 遊び場所までの距離別集計結果

図－７ 遊び道具と調達方法別集計結果

等の複数の微地形と同一のグループに布置され、水辺の遊びを担保する上で、多様な微地形の存在が重要であることが分かる。

遊び場所の土地の被覆状態との関係(図-6)では、乗り物遊びや個人戦ゲーム遊び、球技遊び、攻防戦遊び、おもちゃ遊びといった複数の遊びが、『土』と同一のグループに布置されており、数多くの遊びを行う上で裸地の存在が非常に重要であることが分かる。身体動作遊びや陸系動物遊び、陸系植物遊び、大人の目から逃れた場所での遊びは、土地被覆の中でも、『草』と『樹木』といった植生と同一グループに布置されており、植物相の存在がこれらの遊びの成立に寄与していることが分かる。さらに、水遊びと水系動物遊びは、『水』や『岩』、『石』、『砂』といった複数の土地被覆と同一のグループに布置されており、微地形と同様に水辺の遊びを担保する上で、土地被覆の多様性が非常に重要であることが伺える。

遊び道具の調達方法で見ると(図-7)、個人戦ゲーム遊びと球技遊びだけは特に調達方法に費用がかかる遊びであり、その他の遊びは身近にあるものを自らで加工するか利用するなどとなっている。乗り物遊びや大人の目から逃れた場所での遊び、水系動物遊び、おもちゃ遊び等では、『加工利用』の割合が非常に高く、遊び場所の近くにある樹木の枝や草花等を加工して利用していることが伺える。一方、水遊びや陸系植物遊びでは、『道具なし』がほとんどであり、特別な遊び道具がなくても行える遊びであったといえる。

以上より、昭和30年代の屋外遊びを支えていた物理的条件について整理する。まず、水辺の遊びでは、緩急のある斜面や変化のある水深等の複数の微地形と水や岩、石、砂等の多様な土地被覆の存在が重要であることが明らかとなった。ヒアリング調査における被験者から得られた当時の遊び場所の詳しい描写も踏まえると、各種の微地形と土地被覆が関係し合う事で、砂地や浅い水深での安全な遊びや岩場からの飛び込み、深みのある場所ならではの本格的な水泳、釣り等の水遊びが可能となり、入り組んだ護岸形態や植物が繁茂することにより魚やカニ等の多様な水生生物が生息するなど、水辺遊びを支えていたと考えられる。また、遊び場所に草や樹木等の植物相が存在することも数多くの遊びを成立させる上で非常に重要であると考えられる。樹木が存在することでターザンごっこや木登りが行え、その枝や葉を材料とすることで魚つりの釣竿や竹馬、笹舟といった遊び道具の確保につながっていたと考えられる。また、秘密基地といった大人の目から逃れた場所での遊びでは樹木が生い茂ることで子ども達の格好の隠れ場所となり、基地づくりの材料にも使われる等のヒアリング調査の質疑応答からも、植物相の存在が数多くの遊びの成立に寄与していることが明らかとなった。一方、集落内の道や広場、境内地等の各種のオープンスペースでは、ビー玉等の個人戦ゲーム遊びや鬼ごっこ、陣取りといったゲーム的な遊びを可能にしており、障害物の無い広がりのあるフラットな空間構造と裸地面の存在が数多くの遊びを行うために非常に重要であったことが明らかとなった。さらに、7割以上の遊びが自宅から近い場所で行われていることから、身近に日常的に利用できる遊び場所が存在することが屋外遊びの成立に不可欠であることも明らかとなった。

(ii) 遊びと遊び仲間の条件の関係

図-8~10は遊び仲間の条件に関わるアイテム毎のカテゴリー別の遊び数の単純集計結果を示している。

遊びと遊びの対象年齢との関係を見ると(図-8)、全ての遊びで、『小学生期』の割合が非常に高く、小学生期が最も腕白に屋外遊びを行っていた期間であると考えられる。そのような中で、水遊びと水系動物遊びだけは『中学生期』の割合も比較的高く、水泳や釣り等は幅広い年齢層に及んでいることが分かる。

遊び仲間の人数との関係を見る(図-9)。まず、身体動作遊

図-8 遊びの対象年齢別集計結果

図-9 遊び仲間の人数構成別集計結果

図-10 遊び仲間の世代構成と中心人物別集計結果

びや水遊び、乗り物遊び、大人の目から逃れた場所での遊び、攻防戦遊び、陸系動物遊び、おもちゃ遊びは人数に左右されことなく、多様な集団構成で遊ばれていることが分かる。一方、個人戦ゲーム遊びと陸系動物遊び、水系動物遊びは『小集団』の割合

が最も多くなっており、ベッタン等のゲーム的な遊びや虫とり、魚釣り等の遊びは少人数が適していると考えられる。また、球技遊びは『大人数』の割合が非常に高く、球技という遊びの内容上大勢の人数が必要になることが分かる。

遊び仲間の世代構成との関係では（図-10）、全ての遊びで、『多世代：ガキ大将や年上のリーダーがいる』が8割前後と非常に高くなっており、昭和30年代当時は、年下と同年、年上が混ざって遊ぶ多世代型の仲間構成が一般的であり、ガキ大将といった遊びのリーダーを中心に数多くの遊びを行っていたことが分かる。一方、身体動作遊びと個人戦ゲーム遊び、球技遊び、攻防戦遊び、水系動物遊びでは、『同世代：特定のリーダーはいない』の割合も比較的多く、同世代の子どもで構成される集団での遊びも見受けられた。

以上より、昭和30年代の屋外遊びを支える遊び仲間の条件を整理する。まず、遊びの対象年齢からは、全ての遊びで小学生期の割合が非常に高いことが明らかとなった。この期間は屋外での遊びを行う重要な時期であったと考えられ、仙田が述べているように当時の子ども達は幼いころから遊びを通し自然と触れ合っていたことが伺える。また、遊び仲間の人数では、ゲーム的な遊びや魚釣り等の特定の遊びは少人数で行われていたものの、大部分の遊びは多様な人数構成で遊ばれていることや、一部で同世代型の仲間構成が見られるものの、全ての遊びで多世代型の仲間構成が非常に高くなっていることから、当時の多様な屋外遊びを行う上で多人数・多世代構成の仲間編成が非常に重要であったと考えられる。この結果は、藤本の研究においても、当時の子ども社会の中では、ガキ大将や年長の人が遊びのリーダーとなり、年下の子どもの安全性の確保や水辺での遊びの作法、ゲーム的遊びのルール指導などを行うことで数多くの遊びを可能にしていたことが述べられていることと一致する。従って、同年代や年上の友達からの知恵の伝達や交流が屋外遊びを支える重要な環境条件の一つであり、当時の遊び仲間は異なった年齢の子ども達を幅広く包み込むタテ型のものであったことから、遊び道具の作り方や遊びの作法、安全性の確保といった「遊び方」を代々伝える仕組みが整っていたと考えられる。

4. まとめ

昭和30年代の貝塚市では、山林や河川、海浜などの自然地や居住地域である集落内の至る場所が、多くの子ども達によって格好の遊び場所として利用され、様々な種類の屋外遊びが行われていたことが分かった。近木川の上流や中流の各所では、緩急のある斜面や深さの異なる水深で構成される微地形と水や岩、石等の様々な土地被覆といった物理的条件が備わることで多様な水辺の遊びが可能となることや山林や雑木林においては草や樹木という種々の土地被覆が存在することで、虫とりや基地づくり等の数多くの屋外遊びを成立させていたことが明らかとなった。特に遊び場所の環境条件として土地被覆に植物相が存在することは、川や池周辺では釣竿として、雑木林周辺では竹とんぼや秘密基地といった様々な遊び道具の材料の提供につながっていたことは注目に値する。一方、自然性の高いオープンスペースとは対照的に、集落内部に立地する広場や道、寺の境内等の人工系オープンスペースでは、子ども達が力一杯走り回れるための土の平坦な地面が、鬼ごっこやかくれんぼ等の様々な遊びを成立させる条件として非常に重要であったことも明らかとなった。さらに、これらの遊びが集落内部に集中して行われていたことから、身近に各種のオープンスペースが存在することが、数多くの屋外遊びの成立を担保する上で重要であったことも明らかとなった。さらに、遊び仲間の条件からは、小学生の期間に遊びを通した自然に触れ合う機会が多かったことや、遊び仲間が多人数・多世代で構成できていた

ことが、昭和30年代当時の子どもの屋外遊びを支える上で非常に重要な環境条件であったことが確認できた。特に、異なった年齢の子ども達を幅広く包み込んだタテ型の遊び仲間の構成は、ガキ大将や年上の子どもが年下の子どもたちの安全や遊び方を指導するような環境を担保していたと考えられる。また、タテ型のものであったことが様々な遊び方や遊びの技術を年下の子どもたちに伝達していく仕組みとしても整っていたと考えられる。

以上のことから、子どもの遊びにとって魅力的な屋外空間が失われつつある現代の遊び環境を考えると、居住地域の近くにいままだ残されているため池や河川等の水辺空間、管理が放棄されている雑木林や田畑等の二次的な自然環境を子どもの遊び場所として再活用していく試みや居住地域に数が少なくなったとはいえ、いまだ残されている小広場や社寺の境内の利活用の仕組みを見直すことが子どもの屋外遊びの活性化や魅力的な遊び場所の形成につながると考えられる。その際、これらの遊び場所の再活用の仕組みとともに、地域に根付いた子どもコミュニティの再生が不可欠であり、子どもコミュニティの再生によって多世代間の交流を築き、遊びの伝承や安全性等を担保していくことも重要な課題であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 藤本浩之輔（1974）：子どもの遊び空間：NHK ブックス
- 2) 仙田満（1987）：あそび環境のデザイン：鹿島出版会
- 3) 斉藤たま（2000）：野に遊ぶー自然の中の子供：平凡社ライブラリー
- 4) 嘉田由紀（2000）：水辺遊びの生態学ー琵琶湖地域の三世代の語りから：農漁村文化協会
- 5) 仙田満（1998）：日本における1975年頃から1995年頃の約20年間におけるこどものあそび環境の変化の研究：都市計画211, 73-80
- 6) 仙田満・岡田英紀（1993）：子どものあそび環境の構造的変化に関する研究ー横浜・山形における経年比較調査による：第28回日本都市計画学会学術研究論文集, 763-768
- 7) 谷口新・仙田満・矢田努・水谷考治（1999）：あそび環境要素からみた計画集合住宅地におけるこどものあそび構造：日本建築学会計画系論文集 518, 89-96
- 8) 浦添綾子・仙田満・辻吉隆・矢田努（2000）：あそび環境よりみた小児専門病院病棟の建築計画に関する基礎的研究：日本建築学会計画系論文集 535, 99-105
- 9) 三輪律江・仙田満・矢田努（2001）：こどものあそび空間発生性に関する研究ー大都市市街地におけるこどものあそび環境実態調査データにもとづく分析：日本建築学会計画系論文集 539, 187-194
- 10) 長山宗美（1988）：子供の遊びに影響を与える環境的要因に関する研究：造園雑誌 51(5), 222-227
- 11) 佐藤丘・中村攻（1986）：子どもの遊びに供される地域空間に関する研究：造園雑誌 49(5), 245-250
- 12) 安藤正隆・松本直司（2000）：都市内公園の水系施設における子供の遊び行為と空間条件の関係ー名古屋市内公園での調査分析：第35回日本都市計画学会学術研究論文集, 637-642
- 13) 大越美香・熊谷洋一・香川隆英（2004）：里山における子ども時代の自然体験と動植物の認識：日本造園学会誌 ランドスケープ研究 67(5), 647-652
- 14) 木下勇（2002）：子ども・若者の参画ーR・ハートの問題提起に依て：子どもの参画情報センター, 12-27
- 15) 土地分類図（1976）：国土庁土地局
- 16) 大阪府統計年鑑（2004）：大阪府
- 17) 貝塚市市勢再覧（1960）：貝塚市